

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520833

研究課題名(和文) コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーの総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Research on the Pan-American Agency of the Comintern

研究代表者

山内 昭人 (YAMANOUCHI, Akito)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00124850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)： 初期コミンテルンの一在外ビューロー、パンアメリカン・エイジェンシーに関して基礎的研究に続いて、アメリカ・メキシコに次ぐ、残されたカナダ・南米の活動実態の解明、活動の全貌解明と問題点の抽出を果たすことによって総合的研究をめざした。

エイジェンシーはコミンテルン本部によって政治的にも財政的にも生殺与奪権を握られ、加えて内部対立と当該地に固有の問題点もあり、自立的な運動の発展に貢献する可能性は低かったとまとめられた。ただしカナダの場合、隣接するアメリカ共産主義両党各支部の貢献等の好条件と現地の自助努力もあり、共産党及び労働者党を創設する上でエイジェンシーは決定的な役割を果たした。

研究成果の概要(英文)： Following the basic research of a Foreign Bureau, the Pan-American Agency of the early Comintern, this study sought to carry out its comprehensive research, by means of (1) clarifying the actual conditions of its activities in Canada and South America, subsequent to doing in the USA and Mexico; (2) giving an entire picture of its activities and raising disputed points.

The headquarters of the Comintern held politically and financially the power of life and death over the Agency. There were also the conflicts among the members of the Agency and the problems to solve peculiar to the said countries. It was hardly possible for the Agency to contribute its efforts to the development of self-supporting movements in those countries. In Canada, however, the Agency could play a decisive role in forming the Communist Party and the Workers' Party owing to favorable conditions, such as efforts of each section of the two communist parties of America, and the Canadian self-supporting efforts.

研究分野：西洋史

 キーワード： 南北アメリカ史 コミンテルン パンアメリカン・エイジェンシー アメリカ共産党 カナダ共産党  
 メキシコ共産党

## 1. 研究開始当初の背景

旧ソ連の文書館史料の公開を機に、世界的規模でコミンテルンの包括的な新研究が欧米を中心にスタートした。一方、私の40数年にわたるインタナショナル史研究も第2インタナショナルの崩壊から始めてようやく第3インタナショナル(コミンテルン)の創設期へと進んできた。本研究でめざすのは、初期コミンテルンの国際的活動で重要な役割を果たした在外ビューローのうち、未だ世界中で果たされていないコミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーの総合的研究である。

平成16~19年度の科学研究費補助金(基盤研究(C))を得ての前の「コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシー基礎的研究」で、以下が果たされた。(1) アメリカからメキシコへ赴いた同エイジェンシー議長片山潜を中心に南北アメリカの同志たちと取り交わした声明、書簡類、及びモスクワのコミンテルン本部へ密送した報告書など根本史料を収集し、編集のうえ原文で科研費報告書の中で公表した。(2) それら史料及び関連文献のチェックにより、エイジェンシーの活動実態の解明に着手し、最初にアメリカ及びメキシコでの活動実態をほぼ解明し、付随して、片山が密接な関係を保持していた在米日本人社会主義団及び団を通じて接触していた日本の社会主義指導者との関係を解明した。

近年ロシアの文書館史料公開の流れの中で、コミンテルン関係もマイクロフィルムや史料集によって公表されつつあるが、パンアメリカン・エイジェンシー関係の史料は、露語史料集『コミンテルンとラテンアメリカ』(モスクワ、1998)にも2点しか収録されておらず、上記科研費報告書(英語版、2007年5月)の中で私が差出人・宛名及び関係組織ごとにまとめて精選・編集した35点の書簡類(原文)が、エイジェンシーの世界最初の網羅的な史料集となっている。その直前2006年11月にメキシコのD. スペンサー博士がスペイン語の史料集『メキシコにおけるコミンテルン1919-1922年』を刊行したが、収録史料は原文のままではなくスペイン語訳され、しかもエイジェンシーのメキシコ関係史料だけを収録したものであり、エイジェンシー全体の史料集とはなっていない。

研究史について述べれば、ロシアのラザリ・ヘイフェッツとヴィクトル・ヘイフェッツ親子の両博士がいち早く文書館史料を活用して1990年代末以来、メキシコないし中南米とコミンテルンとの関係史の研究を著書と多くの論文によって露語、英語、スペイン語で公刊している。それらの著作は、あくまで中南米でのエイジェンシーの研究に留まっており、アメリカ・カナダには及んでいないし、史料に忠実でない記述が散見する。

その点、スペンサー博士が上記史料集を踏まえて刊行したばかりのスペイン語の研究

書『メキシコにおけるコミンテルンの最初の諸困難』(メキシコシティ、2009)は、手堅い実証性を発揮しているものの、メキシコにテーマが限定され、しかもコミンテルン本部との関係を分析するには露語を駆使することができていない難点が見受けられる。

## 2. 研究の目的

コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーに関して既に私は平成16~19年度にその基礎的研究を終えており、今回以下の2点を果たすことによって総合的研究をめざす。

- (1) アメリカ・メキシコに次いで、残されたカナダ・南米での活動実態の解明。特にカナダについて、関係史料を最近収蔵・公開することになった現地文書館への史料調査を本研究のメインと位置づけ、精力的に行う。
- (2) 前回及び今回の研究を踏まえ、エイジェンシーの創設から解散に至る経過及び活動実態の全貌を明らかにし、エイジェンシーの成果を見極め、初期コミンテルンが指導する越境する在外活動の問題点の抽出に努める。

## 3. 研究の方法

- (1) モスクワのロシア国立社会-政治史アルヒーフ(ルガスピ)からコミンテルン関係史料を購入し、最近その整理を終え、制限付きの利用が可能となったばかりのオタワの国立カナダ図書・文書館を1年目と2年目に訪れ、関係史料の全体的調査及び網羅的収集を行う。
- (2) エイジェンシー関係の史料については、ルガスピのコミンテルン文庫には独立したファイルはなく、主として同議長を務めた片山潜ファイル、メキシコ共産党ファイルなどに分散して収録されており、既に私は関係史料を収集済みで、それらをカナダ・南米に関係する記述に絞って再読し、重要記述をパソコン入力し、データベースを作成する。新たに入手するカナダ関係史料についても、同様の作業を行う。最終の3年目には、2年にわたって作成したデータベースの通覧及び関係史料集の最終点検を踏まえて、エイジェンシーの全活動実態を把握し、その上に、エイジェンシーの活動が果たしてどれほどの成果を収めたのか、収めなかったのか、を見極める。
- (3) 2年目にオタワの帰路、ワシントン D.C. のアメリカ国立公文書館及び議会図書館で、3年目にニューヨークの公共図書館及びコロンビア大学稀覯本・手稿図書館で、それぞれエイジェンシーの関係史料の最終調査・収集を行う。
- (4) 前回の研究成果を重ねて、総合的な研究を果たし、研究成果報告書を作成する。そ

の際、カナダでの史料調査で重要史料が多く発見できた場合、前回の基礎的研究において私が編集した史料集の増補改訂版を作成する。

#### 4. 研究成果

本研究が抽出できた問題点は多岐にわたる。その主なものを（場合によって、それに関連する課題も含めて）ここに挙げておく。ただし、予め注記しておけば、以下は当初（先の「基礎的研究」において）カナダの場合を除いてまとめられたものであり、のちに（本「総合的研究」において）カナダの場合もまとめることができたので、各項目において前者に必要な範囲で後者を追記するかたちになっている。

- (1) コミンテルン執行委員会（ECCI）は、阿姆斯特ダム・サブビューロー、さらにすべての在外ビューローの一旦解散を一方的に決定したすぐあと、東アジアとアメリカにだけ特別に二つの在外ビューロー（エイジェンシー）を認めた。にもかかわらず、結局在外ビューローの権限がいままで以上に制限され、かつ「政治的任務の遂行」に関して当初から曖昧さが内包されており、それゆえ混乱の收拾をはかるために今度もまた ECCI によって一方的にパンアメリカン・エイジェンシー解散指令が間接的に出されることになった。たとえ解散するにしても、片山が事業の継続性を強く訴えたことに正面から応えることなく、それどころか実は、解散指令が出される前に既に ECCI 書記局によって新たな類似の組織がこれまた一方的に計画されていた。それに続いて、ECCI 幹部会会議がエイジェンシーの解散を決定するのだが、そのことを片山らは直接知らされることはなかった。
- (2) 在外ビューローは各国共産主義諸組織と ECCI との間の仲介的役割を担わされたにもかかわらず、実際には ECCI からの指令系統が二つあった。すなわち、パンアメリカン・エイジェンシーを通じてだけでなく、在モスクワのアメリカ共産党（CPA）及びアメリカ統一共産党（UCPA）代表を通じてのものがあつた。アメリカ共産主義両党間の対立も手伝って混乱が避けられなかった。  
他方、カナダの場合は、エイジェンシーの、しかもスコットことヤンソンだけからの指令であつた。カナダ共産党の在モスクワ代表は CPA 代表が兼任し、第 3 回コミンテルン大会での政策転換は、CPA 代議員のマーシャルことベダハトが帰国後カナダを訪れたとき伝えられたのだが、マーシャルとスコットは共同歩調をとっていたので、指令系統の混乱はなかった。
- (3) その両党間の対立の溝は深く、とりわけ UCPA へ合流しなかったロシア人連盟を

中心とした CPA の、相互に歩み寄る余地をほとんど残しえないほどの断乎とした立場が貫かれた。アメリカ合州国における共産主義運動自体へのそのマイナス効果が憂慮されていたのだが、その立場はまたエイジェンシーによる両党統一工作を困難化させる主要因となつた。

しかし、CPA と UCPA との間の対立は、各カナダ支部まで深刻には及ばなかった。カナダ共産党員はウクライナ人、フィンランド人など「外国人分子」が「英語を話す分子」よりも多かったけれども、後者が執行部の 4 分の 3 を占めた。

- (4) アメリカ共産主義両党間の対立は明らかにスコットに影響を及ぼし、彼にはどうしても自らの出身母体となつていた UCPA への肩入れがあつた。ただし、CPA 出身のフレイナ及び片山には（同党の傍流となつていたこともあり）CPA への肩入れは特にはなかった。とりわけ片山とスコットの間では、資質の問題も関わって対立が根深く、それゆえにエイジェンシーの権限の分散が生じかねず、そのため CPA にとっては在米スコットと接触しておけばよく、エイジェンシーが機能しないことの責任は CPA 側にはない、と統一後の CPA にエイジェンシーは突き放されもした。

この片山とスコットの対立は、カナダをめぐっても同様だつた。片山とは対照的にスコットは（最初の報告を除いて）多くを語らなかつたけれども、独りでかなりのことを成し遂げたことはまちがいない。片山はスコットがメキシコに来ないことを約束がちがうと糾弾しつづけたが、スコットのカナダでの活動とその成果をみると、スコットなりにとどまる理由が十分にあつた。けれども、約束違反は違反なのだからきちんと説明すべきであつたろう。

そして三人目のフレイナの活動には、かつてアメリカ・レフトウイング運動で活躍した生彩はなかつた。最初、エイジェンシー資金の運搬役としてのフレイナのベルリン滞在及び再滞在（1920 年 10 月半ば～1921 年 1 月 18 日〔90 日間〕；1921 年 4 月 1 日～6 月 5 日）は、なぜか長すぎ、さまざまな疑念を生んだ。そして最後、かつてのスパイ嫌疑が晴れたあともなおフレイナには嫌疑がくすぶり続け CPA からの信頼を回復しがたかつた中で、エイジェンシーの残された資金の横領嫌疑が再び彼にかけられた。

- (5) エイジェンシーが「最大限の関心」をもつたアメリカ共産主義両党に、エイジェンシーの権限が認められず、逆にその資金だけがあてにされた。当初 ECCI は各国共産主義諸組織に対して資金援助する場合、直接にはなく在外ビューローを介して行うこととしたからであつた。加えて、エイジェンシー内外で金銭トラブルが絶えなかつた。

カナダにおけるエイジェンシーの権限については、カナダ共産党創設前夜から事あるごとにスコットに指示を仰ぎ、また彼の方もその役割を十分に果たしたことから、その権威は掛け値なく認められた。しかし、スコット自身が1921年夏頃からエイジェンシー議長片山及びフレイナと対立していき、権威は失墜させられた。その一方で、カナダのためにエイジェンシーの資金があてにされたことは、合州国の場合と同様だった。

- (6) エイジェンシーの運動は果たしてどれほどの成果を収めたであろうか。エイジェンシーは、両アメリカ大陸を対象にコミンテルン期で最大規模の一つのネットワーク形成をめざし、曲がりなりにも最初の足跡を残した。けれども、アメリカについてはその成果を発揮する前提が、上述のようにそもそも整っていなかったと言えよう。メキシコについては、エイジェンシーが精力的に現地の諸組織と接触を試み、複数のスペイン語機関誌、声明等で訴えようとしたが、その成果の包括的評価は現地側からの史料収集・分析を経なければ下しがたい。けれども史料自体が乏しい現状がある。

あと、スコットが精力を傾けたカナダでの成果、及びアルゼンチンなど南米へ派遣されたコーエン夫妻の成果を確かめる作業が残されていた。南米については、未だ史料の整備状況が悪く、研究を進めることができなかったが、エイジェンシーの当地での活動実績はほとんどみられない。そのことは、南米に派遣された要員の会計報告を見ると現地に持参した資金の一部も活動に提供された形跡がないことから傍証され、「総合的」研究としての弱みは最小限にとどまるものと判断される。カナダについては、以下のようにまとめられる。

カナダ共産党、さらに労働者党の創設へのスコットのイニシアティブは決定的に重要であった。党創設を実現したという意味では、エイジェンシーの最も顕著な成果と言える。カナダ共産党が、いかに多くをスコットに負っていたことか。まず挙げられるべきは、共産党創立大会準備費の約3分の2（約2,000ドル）、その後3カ月間の活動費（3,000ドル）などのエイジェンシーによる資金援助である。それに劣らず重要なのは、スコットがいずれの段階においても党の基本路線の策定に関して実質的に関与し、その他細々とした指示も与え続けたことである。

しかし、合州国の共産主義両党の統合及びメキシコの共産党創設のそれぞれの遅延と比べて、カナダには以下の好条件があったことを見落としてはならない。

カナダと合州国は地理的に隣接し、アメリカ共産主義両党はそれぞれカナダ支部をもち、英語という共通言語をもつ両支部が率先してカナダ共産党創設に

あたった。

ウクライナ人とフィンランド人が党内で多数を占める「外国人」であったが、彼らはCPAロシア人連盟のように強力な言わば「圧力団体」の役割を果たすことはなく、アングロ-ケルト系の活動家が主導した。それは当該移民の政党との関わり方に合州国の場合と大きく異なる特徴があったからである。つまり、ウクライナ人の場合でみると、共産党との関係は「いくぶん曖昧」で、彼らは自らの指導者を通じて関わっていたにすぎない。指導者もまた、党員数に占める高い割合及び党創設時からの党員であるにもかかわらず、党大会に対して正式な代表ではなく友好代表ないしウクライナ・セクション代表としての参加であった。ここに、英語を話すアングロ-ケルト系の指導者を中心に党がまとまりやすい背景があった。

- (7) アメリカ共産主義両党と他のアメリカ大陸の諸党との関係は、エイジェンシーの努力をしても築かれたとはとても言いがたく、両アメリカ大陸のネットワークが構築されるにはあまりにさまざまな障害が立ちだかっていた。一例をあげれば、パンアメリカン・エイジェンシーの名称は合州国においてはしばしば「パン」を省いて使用された。そのことは時として、中南米を意識の外に置いていたからであった。その上、片山の1921年9月24日付ECCI議長ジノヴィエフ宛書簡に垣間見られるCPA側の優越意識（「アメリカ（USA）の同志はラテンアメリカの労働者を見下すことに慣れている」）のような偏見が広がっていたとするならば、ネットワークどころではなくなる。

カナダ共産党もまた、そのネットワークに関与することはなかった。ネットワークの具体的な可能性としては、片山、フレイナが呼びかけた（1921年秋開催予定のAFL系の）パンアメリカ労働者連盟大会への反対キャンペーンがあったであろうが、その不首尾については仲介の労を積極的にとろうとしなかったスコットにも問題があった。この時期、スコット及び彼の指導を受けて創設されたカナダ共産党もまた、全くと言ってよいほどパンアメリカ的の活動の意識をもっていなかった。

結局のところ、いずれの問題点も、今後コミンテルンが指揮する越境する在外活動の困難を予測させるに足るものであった、とまとめられる。

上述のように、南米についての研究が未完であるものの、本研究は曲がりなりにもコミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーに関して国内外において現時点で最も総合的な研究となったと言えよう。

また、前回の科研費報告書に収録した史料

(原文)を全面的に校訂し直し、注も大幅に増やし、さらにこれまで着手できていなかったエイジェンシーのカナダでの活動の実態解明及びすべての活動資金の全般的分析の二領域に関する史料 14 点を新たに加え、計 49 点の史料集の増補改訂版 *Comprehensive Research on the Pan-American Agency of the Comintern. An Interim Publication of Scientific Research Results...*; March 2014, xviii, 178 p.) を 2 年目の本研究を終えるにあたり、研究成果の中間報告書としてまとめることができた。それは本テーマに関して今日最も総合的な史料集となっている。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山内 昭人「カナダ共産党創設とコミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシー」『史淵』査読無, 152 輯, 2015, 51-106

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

山内 昭人 (YAMANOUCHI, Akito)  
九州大学・大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号: 0 0 1 2 4 8 5 0